

## 第2節 濃いグリーンに髪を染めた大学生

まだまだ部落差別を始めとする厳しい差別の現実が存在する。しかし、全体学習を通して、生き生きと自分自身を語ってきた生徒との出会いを振り返るとき、一人一人の輝きが教育そのものを豊かにしていき、人間教育としての同和教育を本物にしていくことを実感する。

10年間、板野中学校において全体学習に取り組んできた私は、様々な研修の場面でその願いや思いを訴えてきた。特に、1996年から2000年の5年間、広島大学教育学部で、集中講義「同和教育演習」を担当した。そこで私は、同和教育は人間教育であり、今問われている学校教育の様々な課題解決への道筋を明らかにしていく営みであることを再確認することになる。

それは、教育実習を間近に控えた4年生を対象にした演習形式の集中講義であり、土曜日、日曜日に実施されたこともあり、受講生の問題意識はかなり高いという認識で引き受けた集中講義であったが、初めてその集中講義の壇上に立ったときの衝撃は、とても大きなものであった。

その教室は階段状の教室であったが、その中ほどに、濃いグリーンに髪を染めた学生が座っていた。壇上に立った瞬間、そのグリーンに染まった髪の毛が私の視界に入ってきたのだが、その髪の毛自体がふっくらとしていた関係で、私にはその学生が、毛糸の帽子でもかぶっているのだろうかと感じた。

しかし、よくよく見ると、それはまぎれもなく髪の毛である。私は戸惑いながら講義を始めるが、私自身の願いや思いを身体全体で受け止めていくように、その学生は私に熱い視線を送り続ける。私はその学生の視線に胸を熱くしながら、自分自身を語り、同和教育の「よろこび」について語っていった。

そして、1日目の講義の最後に「明日皆さんにマイクを回しますから、皆さん自身の受けてきた同和教育や、これまでの人生の中で関わってきた部落問題を始めとする様々な差別の現実について、皆さん自身の体験や生きざまを語り合って、この教育の本質について、ここに集まったみんなで検証していきましょう」と締めくくった。そのとき、そんな私の訴えを身体全体で受け止めて、思いっきり返事をしたグリーンの髪を染めた学生の表情が、とても印象的であった。

その夜は、その講座の担当教授であり、私を広島大学に招いてくださった原田彰先生や大学院生と酒を飲んだが、その酒の席でも、その学生が話題になる。院生の1人が「あんな髪の毛をしてくる学生がいたんですね」と言いながら、「でも、あの学生、本気で話を聞いていましたし、何か言いましたね」という話で盛り上がっていた。私は翌日の講義で、その学生が何を語るのかを楽しみに2日目を迎えるようになる。

しかし、2日目の講義の始まる9時30分、教室を見渡してもそのグリーンの髪の毛をした学生がいないのである。昨日あれだけ一生懸命話を聞いていた表情は何だったのかと思いながら、講義はスタートする。

その講義は、私の訴えや語りをどのように受け止めたかを語り合っていく形で、一人一人の学生が、自分と部落問題の関わりや自分が受けてきた同和教育について、一人一人の思いや考えを語っていく展開となった。

1人目の学生が、部落問題に関わってきた自らの生活と、自分が受けてきた同和教育に対する思いを語り、その感動が教室全体に広がったときである。後ろの扉が突然に開き、一人の学生が勢いよく入ってきた。すでに20分ほど時間が過ぎ、マイクが2人目の学生に渡されようとしているが、その学生は前の方へ歩いてくる。

20分ほど遅れてきたのだから、後ろの方の席に座るのだろうが、その学生は前の方の席に着き、私の方にしっかりと視線を送ってきた。その瞬間である。私はハッとして、その学生を見つめ返した。その学生は、昨日の濃いグリーンに髪を染めた学生だった。しかし、髪の毛は黒くなっていた。

他の学生の視線も、彼の方に行き、しばらく教室は騒然するが、教室にいる一人一人がその学習の意味を検証していくように、やがて全員が2人目の学生の発言に集中した。

2人目の学生も、自分と部落問題との関わりを語り、自分が受けてきた同和教育について淡々と語り、その思いが教室中に広がっていったが、遅れてきた学生はその発言を身体全体で受け止めるように聞き、その発言が終わった瞬間、勢いよく手を挙げた。私は手を挙げる彼の勢いに押されるように指名する。彼は、前日の私の講義内容に思いを馳せながら、彼自身のことを語り出した。

それは、部落問題というのは遠くのことだと思っており、自分自身にかかわる問題とは考えていなかつたということであった。そして、板野中学校の生き生きと自分を語る中学生や、本気でこの問題と向き合う教師の姿に、自分の中の卑屈なものが洗われていったと語りであった。

私は前日の講義の中で、板野中学校の全体学習を通して、解放されていった教師の話をしていた。板野中学校では全体学習がスタートした当初、全体学習を実施した夜、共に取り組んだ仲間と酒を飲み、時間を共有し全体学習に寄せる思いを語り合ったが、そのことが教師集団の大きな研修の場となっていた。

ある時、板野中学校に赴任したばかりの20代の教師が、その酒の席で私に「先生、板野中学校の子どもたちは、どうして自分自身の立場や思いを堂々と語っていくことができるんですか。僕には語れません」と訴え、耳の聞こえない弟のことを恥ずかしがってきただらの差別意識について、目にいっぱいの涙を溜め語り出した。

私が「おまえの弟はいつも泣いているのか」と問い合わせたら、彼は「泣いてません」ときっぱりと答える。しかし、そんな思いで揺れていた教師が、本気で自分自身を語り合っていく全体学習によって変わっていくのである。

彼が大きな一步を踏み出すことになった全体学習で、生徒に訴えた発言は次のようなものだった。「ちょっといいですか。みんなの話を聞いて、自分の差別意識を洗っていくことが、この授業の意味だと思ったので、みんなにつなげて私の話をします。

実は、私の弟は耳が聞こえません。補聴器をかけたらやっと聞こえます。今までそんな状況で頑張っている弟と、どう関わってきたのかと自分で考えたら、ずっとそのことを人に知られるのが嫌でした。私には弟と妹がいるんですけど、妹のことは何のこだわりもなく言えるのに、弟のことはなかなか言えません。自分の実の弟のことが、みんなの前でしゃべれません。そんな自分ででした。

それがこの学習をしていく中で、板野中学校の全体学習に取り組んでいく中で、部落問題を真剣

に考える自分ができました。その学習の中で私は、やっと自分の弟に対する気持ちというのがはっきりとわかつてきました。

自分の中にある弟、極端な言い方をするけど、家族の中だったら気軽に話ができるのに、いざ外で家から出て弟のことが話に出ると、自分の弟でないような、自分には全く関係ないような素振りをしてしまう。そんな自分がすごく恥ずかしいと思えてきた。本当に情けないと思うようになった。実の弟のことさえそんな目で見る自分が、ものすごく恥ずかしくなってきたんです。

私の部落問題学習というのは、自分と弟との関わりだと思うし、私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために部落問題学習をしていきたいと思います。」

この言葉は生徒一人一人の中に強烈に響いていく。教師が本気で語るから生徒も本気で語り出す。生徒の本気の語りが、他の生徒の心を大きく揺さぶり、その一人一人を本気にしていく。同和教育の「よろこび」は人間を信頼し、人間を尊敬し、自分自身が人間として解放され輝いていくところにある。

そんな話を1日目の講義の中で語っていたが、その濃いグリーンに髪を染めていた学生は、私の講義内容に重ねて言葉をつなげた。

「昨日、弟の耳が聞こえないという先生の話をしてくれたけど、それは自分自身のことだと思ったんです。実は私の弟には障害があります。そのことを私はすごく恥ずかしいことのように思ってきました。弟のことにふれられることを、常におそれている自分があります。それが自分の弟に対する差別意識とは僕は気づかなかった。僕は昨日の先生の話を通して、自分の差別意識を認識することができたように思います。」

先生の言葉を繰り返し自分に突きつけながら部落問題を考えたとき、自分が生まれ暮らしてきた町にも部落があったということを思い出したんです。そこで精一杯生きている人たちを、私の家族は決してよく言うことはなかった。父も母も、祖父も祖母も尊敬すべき人ですが、そんな私の家族の中にも厳然と部落の人たちに対する差別意識があり、私はその現実をただ傍観するだけでした。

そんなふるさとにおける部落差別の現実を思い出したとき、この問題に関わって自分に何ができるんだろうと問いかかけました。そこで出した結論は、自分の一番仲の良い友人にこの思いを伝えようということでした。昨晩、私はその友人に電話をしました。『今日、徳島県の中学校の先生の部落問題に対する話を聞いて、俺、本気で部落問題について考えてみたんや。その中で自分の卑屈な意識、自分の差別意識というものが見えてきたんや。この気持ち、おまえ分かってくれるだろうか』という話を友人にしたら、その友人が『その集中講義とってよかったですやないか。おまえにとって部落問題は遠いことかもわからんけど、実は今までおまえにこのことを話したことはないけど、俺は部落の人間や』と聞かされたんです。すごいショックでした。

彼とは大学1年からのつきあいで、ずっと大学4年まで共に行動をしてきました。その4年間の生活の中で、部落に対する差別的な会話もあったと思います。あのとき彼は、その言葉をどう聞いていたんだろうかと考えたら苦しくなってきます。私はその話で、頭の中が冴えきって眠れませんでした。もう一人の友人とこの話をしました。その友人とも、本当の仲間になっていきたいという気持ちで思いを伝えていきました。」

彼は、それまで心の底に秘めていたものが解き放たれていくように語り続けた。その言葉が教室全体に広がり、様々な学生の思いが次から次へと語られていく。この集中講義は、一人一人が当たり前のように自分自身を語り合い、その絆を強くする時間となった。

その集中講義の中で、部落出身という立場を語った学生もいた。その学生のことを別の学生がそのレポートの中に語っているが、本気と本気の語り合いは、一人一人の人生観を大きく変えていくものになる。同和教育にはそんな可能性が秘められているのである。

これは、社会啓発の場もそうであるが、自分に何ができるかを問い合わせる語り合う。そこに部落の解放があり、人間の解放がある。そのことを実感するレポートのいくつかを引用させていただく。

\*\*\*\*\*

### 【想い】広島大学教育学部集中講義「同和教育演習」

話すのは教師ばかりで、聞くのが生徒ばかりというのが、現状でなかろうか

森口健司先生との出会いは印象的であった。先生の背後に、人生を感じたのは、私だけではなかったはずである。「私は実は部落出身です」と発言した履修生はどんな気持ちだったのか、今も考えることがある。

休み時間、森口先生に、私の就職予定県である鹿児島県の同和対策の現状についてお聞きしたところ、鹿児島県は同和対策に関して非常に遅れているということであり、しかもその部落問題は、島差別につながっているということであった。何をかくそう、私が島の出身（奄美大島）なのである。鹿児島県においては通常、種子島、屋久島までを本土とみなし、私の出身地を始めとする奄美群島を島とみなす。そして、私たちもまた、鹿児島県本土よりも沖縄、すなわち琉球文化の一員と考えているきらいがある。

私が中学校の時、バスケットボールの県大会で相手チームから「田舎バスケット」とヤジられた経験があるが、森口先生のお話の中で、八重山列島の生徒が石垣島の高校で馬鹿にされ、石垣島の生徒が琉球大学（沖縄本島）で馬鹿にされたというエピソードは、私にとっては妙にリアリティーがあった。

故郷を離れ、広島へやってきた私は、今でも自分が田舎ものであるコンプレックスを持っている。もちろん、周りの人々は、私が田舎者であることなど、気にも止めいないだろうが、いくら周りの人が「俺も同じ田舎者だよ」「そんなこと気にする必要ないじゃない」などと言っても、コンプレックスが消えてなくなるわけではない。やっぱり私自身がコンプレックスを追い払うような発想の転換をしないと、何も解決はしないのである。

森口先生は、教師の説得ではなく、生徒自身の発言によって、生徒が変わるとおっしゃった。自分自身のために、自分自身が「解放」されることが大切であるとおっしゃった。私の問題と部落問題をいつしょに考えてよいかどうかは分からぬが、私自身の体験からいえば、森口先生のお話はよく理解できるのである。

人生論の本などでは、人の話を聞けることが大切であるといわれている。つまり、今の世の中では、話したがっている人が多すぎて、聞く人が少ないというのである。ところが、実際の学校現場

では、話すのは教師ばかりで聞くのが生徒ばかりというのが現状でなかろうか。生徒は、心の中に考えていることや、話したいことをいっぱい抱え込んでいる気がする。それを全体学習という場で発表させるというやり方は有効だと思う。今の生徒は、大人が思っているほどカラッとはしていないと思う。同和教育など、案外まじめなことを考えているような気がする。(これは私の実感なのだが…)

私は、教育の問題を考えるときには、人間を適度の性善説で捉えるべきだと思う。弱い人間を低い存在とみなし、優越感を味わったり攻撃本能を満たそうとするのは、人間の本質でもあり、誰しもそういう醜い部分を持っているのではないだろうか。だからこそ、そのような人間の醜い部分に気づかせ、その意識を自らの手で洗っていく同和教育は、学校教育の早い時期から取り組むべきものである。差別は人間として許される行為ではないということを教師は強く訴えるべきなのであって、論理的に差別を否定するのでは、絶対に不十分であると考えるが、他の人はどう考えるであろうか。

今、私は『峠を越えて』を少しづつ読んでいるが、生徒の発言一つ一つに熱い息づかいを感じられて非常におもしろい。このような全体学習という取り組みを都会の学校でも、実践できないだろうかと考えてしまう。大衆消費文明の中で生きる都会の生徒たちは、自分に関係のないことに首を突っ込む必要がないのであり、ともすれば、部落問題に対しても無関心となりがちである。なんとか部落問題を人権の問題と関連づけて、部落外の人たちにも何とかして、自分の問題として考えさせるような雰囲気づくりが重要である。そのためにも、教師自身が部落問題をよく勉強し、結局は生徒自身の差別意識をなくすのではなく、教師自身の差別意識をなくすことにつなげることが必要である。

(T・O)

### 板野中学校における同和教育実践について

今まで私が「同和教育」と耳にして連想していたのは、やはり、今まで受けた部落差別の実態といったものを教えるというような教育であった。だから、「同和教育」に対し、部落問題を実際に解決するための手段や方法といったことまでは頭に浮かぶことがなかった。まさに、森口先生が「こういった差別があるということを教えてはいるにすぎない」といわれたような教育しか思いつかなかった。差別問題を実際にどのように解決していくのか、その具体的な例をはじめて板野中学校の実践から学んだと言える。

森口先生は、部落差別の問題を今私たちが生活している現状までさかのぼって、日常生活の中にあるごくわずかな差別意識が、そのおおもとであることを指摘された。そして、このごくわずかな差別意識を消滅させるためには、本当の信頼できる人間関係をつくっていくことが、同和教育の本質であり、そのためには、教師自身が本心と本心をぶつけ合って授業をしていかなければならないことも指摘された。

私は以上のような話を聞いて「なるほど！」と心の中でうなっていた。差別問題への本当の取り組みとは、このようなものであるのかと本当に感じ入った。自分自身を振り返ってみて、私は本当

に日常的に差別をやりまくっている感じがする。現在、私は大学院の試験に向けて勉強しているのだが、正直、同じ学科の仲間に「俺がお前たちに負けるはずがない」だとか、遊びほうけている学科の人たちに対し陰で「やるときにやらない奴は好きではない」といったことなどを本当に思ってしまっているのだ。もし、本当の人間関係ができていたならこんな感情は起こるはずがない。よく考えてみると、確かに、私は中学・高校と優等生ぶって、周りの仲間を差別していたのかもしれない。そして、これはあくまで予想だが、現代人は人付き合いが下手であるとよくいわれ、表面上のつきあいしかしていないと指摘されるのは、私のように差別意識をもつ人間が増え、本当の仲間というのがつくれない人が増えたからなのではないか。また、表面的な人間関係にあきあきした人が孤立を深めていっているのではないか。

実際に森口先生の話を聞いていて、私は本当に自分自身が悲しくなった。この中学生たちのように心の本当の底からの声を私は今まで、誰にも語ったことがないように思われたからだ。そして、人間関係の大切さを強調される先生の話を聞いて、現に今でも本当の人間関係をつくりきれない私が教師になったとき、生徒たちがそのような人間関係をつくれるように指導することができるのだろうかと心が重くなってしまった。

そして、本当の人間関係をつくるためには、実際どうすればいいのかということが問題になった。本心と本心をぶつけることがその最初の一歩であることはわかった。しかし、果たして私はそんなことができるのか。例えば、周りの人間が酒を飲もう、騒ごうと声を掛け合っているのに、私には、そんな声はかけられない。本心では「私も仲間に入れてほしい」と思っているのに、表面上は、誘ってくれなくてけっこうといった顔をしている。また、昨日、飲んで楽しかったという声を聞くと本心は「何で俺は誘ってくれないのだ」と思いながら、何食わぬ顔でその話を聞いている。いつの間にか私は「本心」を、何か固いもので覆い隠っているようだ。

森口先生の授業は「同和教育」に関するものでありながら、私にとっては、私自身と向き合う、本当に自問自答を行わせる授業であった。自分に向き合う。このことが相手に本心をぶつける前に大切なことなのではないか。そんな気がした。

それでも私はこわい。自分自身の弱い、醜い心に向き合うことも、そして、それを相手にさらけ出すこともなかなかできないかもしれない。しかし、自分自身をみつめ直すことをしたのは、本当に久しくなかった気がする。大学に入ってむしろ、自分の心と向き合うよりも、それをどのように隠すかといったことを心がけていた生活してきたような感じがする。

森口先生の授業をうけて、「同和教育」に対する考え方だけでなく、その人間関係といったことで深く考え込んだのは、おそらく私だけではないだろう。それだけ、何か深く感じる授業だった。

(H・M)

### 板野中学校の同和教育実践授業からこれまでの自分を振り返って

今回の3日間にわたる授業は、私にとって大きな意味を持つものであった。授業を通して私は今までの自分を振り返り、これから自分を考えた。

はじめて差別という言葉を聞いたのがいつであったのか、部落問題という言葉を知ったのがいつ

であったのか、正確には覚えていない。私は小学生の時から「将来先生になりたい」と思っており、その気持ちが確かなものになったきっかけは、O先生に出会ったことだった。私の出身校は、広島県内の中・高一貫のカトリックの学校である。博愛の精神に基づくキリスト教の教えに中学1年でふれ、隣人を愛する人であろうと思ったことを今も覚えている。

O先生とは中学3年の公民の授業で出会った。私は社会科全般が苦手であったのだが、「ここはどこ？私は誰？」から始まり、常にその疑問を投げかけながら進む授業は、今まで受けてきた社会科とは全く違い、心の中に入ってきた。そこで私は、部落問題・在日韓国朝鮮人問題を知り考えた。

思春期で正義感に燃えていた私は、いわれもない差別を受けて苦しんでいる人たちがいることに怒りを感じた。そして、母に尋ねた。「私が部落出身の人と結婚するっていったらどうする？」「あなたが好きな人なら関係ないよ」という期待した答えとは裏腹に、「やっぱり嫌よね。いらん苦労はせんでいい」という返事が返ってきた。ショックだった。

今回の演習をきっかけに、私はもう一度母に同じ質問をした。「育ってきた環境も違うだろうし、やっぱり嫌よね」と言われた。高校3年の弟は、「僕らの世代には関係ない。意識の中にはないから。S（私のこと）だって人のうわさ話して笑ってるでしょ。それも差別じゃないの？」と言った。私はドキッとした。確かに、自分ではどうしようもないことをバカにして笑うことも差別に違いない。そこに悪意がなかったとしても、それは差別の芽だ。差別の芽を摘むためには、やはり意識することが必要なのだと思う。

将来結婚するつもりの相手にも部落問題について聞いてみた。彼は宮崎県の出身なのだが、弟と同じことを言った。他のことでめったに意見が違ったことがなかったので、はじめてと言っていいほど討論をした。意識せずにいれば差別がなくなるという見解は、当事者を無視した客観論にすぎない。誰も自分に対して完璧な自信など持つてはいない。私自身、中学時代から肌の弱さに悩み、ニキビの一つも出ない級友を見てうらやましく思ったものだった。すべすべした顔の友だちがたつた一つのニキビで大騒ぎをする度に傷ついていた。

自分に自信が持てなくて、非常に恥ずかしいことだが自分よりもひどい状態の人を見て、「あの人よりも」と思ったことも少なからずもある。最悪の心の状態から逃げられたのは、どんな自分でまるごと受け止めてくれる人の存在を感じたからだった。この気持ちを差別の克服に生かしていきたい。

全く自分の及ばない理由で自信を失い、苦しんでいる人が現実に存在することをどうすれば、事実の伝達を越えた深い理解に結びつけていけるのか。頑なな固定観念を持ち続ける人たちの意識をどうすれば変えていけるのか。私はそこで学校教育が大きな意味を持ってくると思う。

板野中学校の例にあるように、真剣に自分たちの生き方を考える子どもたちの姿を見て、大人たちが考えさせられる。またその姿を見て子どもたちが考える。こうした双方向の動きを導き出す可能性をもつものが教育である。人が生きるということはいかに重大なことか。この事実の理解が浸透すれば、この世からいじめも差別もなくなるはずだ。教師は決して諦めてはならない。投げ出してはならない。生徒の立場に立たずして教育は存在しない。

O先生に生きることのすばらしさを感じる機会を与えていただき、私も人間の生き方に関わって

いきたいと思った。社会科が苦手であったため、受験にも関係せず、生活に密着した事柄を扱えると思い、家庭科を選択した。しかし、大学では学ぶと共に大いに遊び、「このままで教壇に立つわけには行かない」と思い、大学院に進学した。昨今の就職難の中、単なる一職業として教師を志す人もいる。私も学部時代、その方向に流れかけていた。

今回の授業を通じ、「先生になるんだ」と思った頃の懸命な熱い気持ちを取り戻した。生徒が冷めているなら、教師こそ熱く心に働きかけて行くべきだ。どんな環境の中にあっても、一人一人を大切にする教師になりたい。そして今、子どもから大人への変化に揺れている中学生に関わっていこうと決意した。私の暮らす甘日市で、一つのいじめであっても許したくない。そして全国、全世界で人々が自分らしく生きられることを目指していきたい。

これまででは、採用試験があるから受験勉強しなければならないと思っていた。今は違う。教師として活動するために、現在その試験をクリアすることが要求されているのであれば、それを乗り越えていこうと思うようになった。一人の人間の成長に大きく関わる教師という職業は、本当にすばらしい。私も「この職業に就けてよかった」と思うため、自分を磨きながらまず採用試験のクリアを目指し、一生努力し続けたい。

(S・S)

### 素直に自分の思いを話す場が重要である

ビデオで見た森口先生の授業は、これがまさか同和教育かと思うほど、生徒の発言に終始したものだった。生徒一人一人が素直に自分の思いを話し、それを受け止め、考え、返す。それが延々と続いた。生徒が本気で部落問題に取り組んでいるのがよく伝わってきた。私はこのビデオを見て、素直に自分の思いを話せる場だったからこそ、生徒がこれだけ発言できるのであり、こうした同和教育の授業ができるのだと思った。すなわち森口先生の実践を見てまず見習うべきは、先生の学級づくりにあると思った。この辺りのことについてレポートにまとめてみたい。

もちろん、森口先生の講義全体を通して、教師を目指すものとして、その他多くの教訓を得た。また、それ以上に一人の人間として同和教育への姿勢、認識がいかに甘かったか、大いに反省させられた。

私がビデオを見てまず思ったのは、素直に自分の思いや悩みを話せる場がいかに重要であるかということである。ビデオで見た森口先生の授業や、森口先生のお話自体によっても気づかされたことではあったが、集中講義の最終日に学生一人一人が意見を述べたときにもやはり痛感した。そこには二つの意義がある。まず話す本人が解放される点である。

集中講義最終日のその場では、数人の学生は涙交じりに、部落差別の問題に自らの被差別体験を重ねて意見を述べた。しかしそれは意見というよりも、今まで抑圧されていた感情が噴出したものだった。抑圧された感情をこの場でうち明けることによってそれから解放される。これは今まで経験したことのない教室の光景であったが、ものすごく有意義なすばらしいことだと思った。抑圧された感情というのは他人に話することで解放されるが、ふだんなかなか口にすることができない。これは私自身の経験からもそうである。他人に話しても仕方ない、わかってもらえないと思うからだ。

それはこういう貴重な場においてのみ口にできる。ふだんうすもれてしまいがちだからこそ、こうした素直に自分の思いを話せる場は必要なのである。

次に聞く立場の者が、彼らの痛みをより深く知ることができるという点でも、このような場は重要である。私は彼差別部落出身者の生の声を今回初めて聞いた。彼らの言葉は私の心を大きく揺さぶり、私は涙を呞みしめながらそれを聞いた。今まで同和教育を受けてきて、差別はよくない、差別はしまいと安易に結論づけてきた自分がいたたまれなくなってきた。私がいかに彼らの痛みに対して無知であり、無知のまま安易に部落差別の問題を決着させてきたことか。彼らの言葉は本気であり、素直であり、それだけに私の心を大きく揺さぶった。部落差別の問題は部落の人々の痛みを知ることなしに取り組むことはできないであろう。しかし、人々の痛みを知るというのは、まさに心が揺さぶられるということであって、部落問題の資料や統計を見て、頭で理解することはできないのではないか。これは部落差別に限ったことでなく、他人の痛みを知るという点で直接本人の思いを聞くというのは、何よりも増して大事なことであり、そういった意味でも素直に自分の思いを話す場というのは重要である。

素直に自分の思いを話せる場とは、言い換えれば仲間意識のある場、信頼しあえる場である。森口先生はクラスを信頼し合える場にすることで、同和教育の土台をつくり上げた。ビデオで見た先生の同和教育の授業は、まさにこうした学級づくりが大前提となっている。

さらに森口先生は今回の集中講義もこのような場にしてしまった。森口先生はその一つの方法として弱さ、悩みを含めた自分というものを積極的に示していくことだとおっしゃったように思う。ありのままの自分の姿を率先して提示していくことで、十分なきっかけになり得るはずだ。さらに4月（学級開き）が重要な時期だともおっしゃった。しかし、実際このような場をつくり出すことはとても難しいに違いない。だが、クラスに仲間意識が芽生え、信頼関係が生まれるようになれば、学校で起きる多くの問題が解決できるように思う。こういった意味でも学級経営には積極的に取り組みたい。少しでも信頼し合える人間関係が、クラスにより多く芽生えたらどんなにすばらしいことだろうと思う。

(K・K)

### まずは自己の中にある差別から

森口先生のお話は、私にとって新鮮な体験だった。まず、先生の明るさにびっくりしてしまった。今までの経験からか、同和教育といえば、暗く悲しいイメージしかなかったから、本当のことを言えば、今回のお話も、あまり聞きたくないとと思っていた。けれども、私の予想に反して先生のお話は、明るい希望に満ちていたし、月並みな言葉だけれど、まさに感動してしまった。

私は、部落問題について本当に無知だったと思う。そのくせ「寝た子は起こすな論」が正しいと考えていた。きっと、その方が楽だからという心理もあつただろうと今なら思える。私には関係がないと済ますことのできる環境に育ったことを今まででは、幸せなことだと感じていた。周りに、同和地区がほとんどなく、出身者に会ったこともなかつたので、私の世界とは切り離された問題であった。

森口先生は、私が初めて出会った被差別体験者であった。私は、自分が直接そういう人と会ってしまうと、知らないでいられる幸せな世界が崩れてしまうのではないかと恐れていた。ところが、実際には崩れるどころか、私の世界は何倍にも広がり、未来も明るくなったと感じた。私は、部落問題について知り、考えることが今までの人生になかったのが、とてつもない損失のような気がしている。そういう点からも、森口先生のお話は私にとって重大な意味を持っていると思う。

先生のお話で1番印象に残っているのは、先生自身がお父さんに対して差別意識を持っていた、というエピソードである。京都の大学へ行き、自分の素姓を明かさずに差別を平然と行う人々と接するつらい生活、けれども故郷（被差別部落）には帰りたくない。父親に姿を見せてほしくない。聞いていていたたまれなくなった。自分の親を堂々と人目にさらせない、そう思ってしまう自分の嫌な心、弱い心に気づくとき、それは多分、自分が差別を受けたことよりも、はるかにつらいことだろうと思う。

どうして、自分は差別されるつらさを知っているはずなのにと、自分自身が許せない気持ちでいっぱいになるだろう。私もなんとなく分かる気がしたから、いたたまれなくなった。けれど、そんな自分に気づき、克服しようとするところが勝負であり、差別と闘うきっかけにしていくことの大切さを先生は、力説してくださいました。

私は、先生のように立派な実践をしている人は、生まれついての聖人か、何かと勝手に勘違いをしていたようである。よく考えてみると、そんなはずはない。むしろ、自分の身に照らした過去のある人の方が、より実のあることを成せるのではないだろうか。私は先生のお父さんにまつわるエピソードを聞いて、とても安心した。先生だって、かつては悩んでいたけど、今ではあんなに明るく力強いではないか、そう思うと妙に希望と自信が出てきた。私は今まで、「差別はいけない」と思うあまり、「自分はするはずがない」「差別する人を（自分は）決して（その存在すら）許せない」と頑なに思っていた。だから、人の差別はとがめて非難できるけれども、自分のことについては差別意識を認めたくないから、つい盲目になってしまっていたようである。いや、知つていながら知らぬふりをしていたのだろうと思う。先生が「まずは自分の中にある差別から」とおっしゃっていた意味がよく分かった。

先生の呼びかけで、私たち聴講生一人一人がマイクでしゃべったことも、とても印象的で新鮮な体験だった。最初は、みんな本当に本音をしゃべるのだろうかと疑い深く聞いていたが、みんなかなり真剣な意見を述べていたと思う。私もそうだけれども、あの場だから話せた人がほとんどだと思う。ふだん、友人との会話で、講義で発言したことを語っていた人は少ないのではないか。自分自身を振り返っても、実に中身のない話を日常しているなあと妙に感心してしまった。先生もおっしゃっていたことであるが、本当に日常こそが本番だと思う。

あのような場は特別だから、みんなの意識がかわるけれど、また日常生活に戻るとそんなことは遠いところに行ってしまう。こんなことでは悲しいしむなし。けれど、そういう私もずっと忘れないかは自信がない。もったいないと思う。せっかく世界が広がりそうになったというのに、私はまた日常に負けてしまうのだろうか。最後になってやたら弱気になってしまったが、同時に森口先生のことを忘れない限り、きっと大丈夫だと思えることも確かである。

この出会い以来、自分の差別意識や嫌なところを素直に見つめられるようになった気がするし、両親や友人とも「差別」について話すこともできたし、新聞などを見ても「差別」に関する記事をかなり興味深く読んだり、私の世界は確実に広がっているはずである。先生に出会ったことを忘れるのは、きっと無理だから、私は大丈夫だと明るく前向きにいきたいと思っている。

(K・S)

### オレが自殺したらみんなイジメをするのをやめてくれるかな

「人間は人間らしく生きるべきだ」これが先生の話を聞いて私が感じたことだった。先生の熱い話を聞いているうちに、私が中学校の頃、受けてきた差別を思い出した。私はF県の出身で、中学校は町立の中学校に通っていた。(つい最近いじめで自殺のあった学校である。) その中学校はC地区でも有名ないわゆる荒れている中学校で、私は希望というよりは絶望感をいたいで入学した。

案の定その中学校は思っていた通りの学校で、私は毎日ビクビクしながら1年生の頃は通っていた。部活動で剣道をやっていた。部活動をやる方が人間的に良いとはよく言われているが、私は一概にはそうはいえないと思う。実際、先生と問題を起こしていた先輩らもいた。よく高校野球で部員の暴力により対外試合禁止となるが、そういうことは全国の高校で絶対にあることだと思う。

私はそんな中で、早くこの生活が終わらないかということだけを考えて学校生活を送っていた。そんな中で私は、いわゆるイジメられている生徒であった。私の学年にはイジメっ子グループと、イジメられっ子グループがあり、私は後者のグループの一員であった。そのグループの中には男子だけでなく女子もいたが、私の友だちと言えるのは、このグループの中だけであった。

この中では、私よりハードにイジメられている人もいたが、その人と大差なく、毎日学校に行くのが本当にイヤであった。中3の夏には部活動のこともあり、このこと(イジメ)もあり、本当にまいってしまい自殺を本当に考えた。

そのとき思ったことは「オレが自殺したら、みんなはイジメをするのをやめてくれるかな」ということだった。私はそんな思いから友だちに「もしオレが遠くへ行ったらどうする」と聞いた。友だちに「転校するのか」と逆に聞かれて、返答に困ってしまった。

学校を早引きして家の小屋で、柱にひもを結んで首をついたら死ねるかなと思い、ひもに首をかけたことがあった。しかし、いざという時、自分の中で、自分が死んだら親はどうなるんだろうと思ってしまい、1／2時間ぐらいそこでじっとしていた。

そのときはもう目の前は真っ暗で、何も見えないという状態でだった。結局は自殺することもできず、あと何年か耐えればいいんだと思い耐えることにした。それから先も何度も死のうと思ったが、結局自殺することはできなかった。今考えると、そのとき自殺しなくてよかったと思うが、今でもそのときのことを思い出すと胸が痛くなってしまう。未だに中学校の同窓会には出席できないし、成人式も行くことができなかった。

先生のお話を聞いているうちに、この暗黒の中学校時代を思い出してしまい、もう一度自分をみつめ直すことができた。私はイジメられたことがあるので、今のイジメられている子の気持ちは少しはわかることができると思う。でも、全部わかることなど絶対にできない。自分の経験からそれ

はわかる。

自分が教師になって、自分のクラスでイジメがあったら、全力で取り組んでいこうと思う。それが私の暗黒の学生時代をみつめ直すいい機会にもなるから…。先生の話は私の負の部分をみつめ直させるいい機会となったと思う。ありがとうございました。

(H・K)

今回の講義で感じたことをそのままでは終わらせたくなかった

人権教育・同和教育は「楽しくないと続かない」という言葉が、全体学習の討論から感じることができた。そして、主体的な討論の中に学ぶ楽しさがあることを実感でき、その重要性に気づくことができたことは、今回得られたものの中でも特に印象的であった。中学・高校時代に受けてきた同和教育は、暗い雰囲気の中で行われ、触れてはいけないものに触れているような後ろめたさがあった。そこには、中途半端に知ることの残酷を見て見ぬ振りをする現状があった。同和教育の時間が過ぎると、自分の中に新しく生まれた屈折した感情に気づき、そのたびに暗い気持ちになった。

ところが今回は違った。部落問題と向き合うことは、後ろめたいことでもなんでもない。むしろ、勇気を持って立ち向かうことは、人間としての誇りをかけた鬪いであり、美しいとさえ感じた。そこには人ととのつながりが存在し、暗さよりも人間の強さ、明るさが勝っていた。部落問題は確かに大変な問題である。しかし、それを解決しようとする過程で人間のすばらしさを発見できる。そう気づいたとき、私と部落問題の壁が崩れ落ちた気がする。

同時に、森口先生のおっしゃった「楽しくないと続かない」という言葉の裏に、これまでの先生のご苦労が見て取れる。高校、大学と部落差別の実態を目の当たりにしながら、おびえ続けた日々、それを乗り越えて、自分の誇りを取り戻したからこそ、上に示したような言葉があるのだろう。

同和教育を通して、人間の最も弱くて醜い部分（差別する気持ち）と、最も強くて美しい部分（差別に立ち向かっていく意志）に触れる。そして、自分自身を解放していくことによって、強くて美しい部分を引き出していく。そのことによって人と人がつながる楽しさを味わえる。以上のような同和教育の構造が、私の中ではっきりと浮かび上がってきた。

また、今回の講義を通して、語り合うことの大切さを改めて認識した。初めて会った人がほとんどだったのに、一体感が得られたのは、みんなが自分の最もつらい部分を吐き出し、それを聞いた他の人がその気持ちを理解しようとしたからである。自分が部落出身者であることを告白してくれた友だちがいた。一瞬空気が張りつめたのがわかった。彼女が背負っている重荷が私のものとしてのしかかり、不合理な差別を受ける当事者になることの重苦しさを実感した。そしてもっと彼女の気持ちを知りたい。差別をなくすために何かをしたいと強く思った。その気持ちを語り合いという場が生んだのだと思う。

私は、今回の講義で感じたことをそのままでは終わらせたくなかった。というより、居てもたつても居られなくなった。今の私にできることは何なのかを考えてみた。そして、まずは自分の中の差別意識の徹底的な解放、次に身近な人への問題提起をしようと考えがまとまつた。そこでさっそ

く、何人かの友だちに講義のことを話し、私の思いを語った。すると、思った以上に大きな反応が得られた。実家の周りに存在する差別のことを語り、さらに考えてから手紙にして送ると言つてくれた友だちもいた。今まであまり考えたことがなかったので、これからは考えたいと言つてくれた友だちもいた。私は、少しでも差別をなくすために行動できた自分と、それを真剣に受け止めてくれた友だちを誇りに思う。同時に、差別は絶対になくすことができると確信した。これからも、身近な人に勇気を持って問題提起することで、自分の中の差別意識と闘つていきたい。

最後に、私が教師になったときのことを考えて書きたいと思う。学校には様々な境遇で育った生徒がいる。一人一人の生徒と話すときはもちろんのこと、学級全体にむかって話す時も、どんな境遇におかれている生徒も傷つかないようにしなければならない。それはとてもエネルギーのいることだし、急にしようと思ってもできないことである。従つて、日常の一言一言に気をつけていきたいと思う。

私は高校時代、ある教師に、誕生日の日にちが月の二倍（6月12日）であるから二重人格だと言われ、B型であるから自分勝手だと言われた。普段からよく話をする教師だったので、すべて冗談でからかったつもりらしかったが、高校生の私には少しつらいものがあった。

私は生物の教師を目指していて、授業では性別を決定する染色体の話や、ABO式血液型の話をすることになる。そういう授業で生徒の偏見を取り除くことも私の使命だと言える。

日常に潜んでいる差別や偏見を一つずつなくし、同時に部落問題も日々の暮らしの中で解決していく。そういう実践力を持ったたくましい生徒を育てるために、私自身優しさと厳しさと、明るさを持って、したたかに生きていきたいと思う。そして、生徒との出会い、他の多くの人の出会いを大切にし、生徒同士の心をつなげて、不合理なものに立ち向かっていく集団としての学級をつくりあげていきたいと思う。

(R・H)

### 自分でも不思議なくらい本心を言い合うことができた

まず始めに5つの不安定要因（経済的・社会的・文化的・心理的・身体的）が複合し、構造的不安定を形成している現実を知って、部落問題を解決していくには様々な視点を持たなければならぬのだと思った。実際に教師になって部落問題に取り組むときに、この5つの要因を知っていなければ、子どもの抱えている背景を正しく知ることはできない。この要因を常に念頭に置いて子どもと接していきたいと思う。

次に板野中学校における学習をビデオで見て、「何でこの子たちはこんなに生き生きとしているんだろう」と驚いた。彼らは本気で自分の言葉で自分を表現していた。そして、それは教師が本気で自分自身を語ることから生まれたものだと思う。人と人がつきあうとき、自分が本心を見せない限り、表面的な付き合い方しかできない。教師と生徒間においても同様で、教師がまずは自分をさらけ出し、信頼関係を築くことから始めなければならないと思った。

そして、入学したときから卒業するまで、途切れることなく一貫した取り組みが必要なのだと感じた。私は道徳の時間やロングホームルームの時にだけ同和教育を受けてきた。それゆえに何か特

別なことをしているという思いがいつもあった。また、「受けている」という感じで「自ら考え取り組んでいる」という思いはなかった。学校全体で教育活動全体で取り組んでいかなければならないことを改めて感じた。

私は高校の国語の教師になりたいと思っている。それは国語が好きだからということもあるが、それ以上に高校生という年代、時代が好きだからである。この年頃は大人と子どもの狭間でいろいろと問題があるが、パワーがある。意欲や興味をたくさん内に秘めている。私もそうだった。そういう年頃の若者に関わっていくことで、自分もいろいろなものを吸収できるのではないかと思っている。実際6月に教育実習で高校生と触れ合ってみて、そのことを実感することができた。

しかし、子どもから大人への成長段階にある貴重な時間、その人にとって一度しかない時間に関わることができるというよろこびの反面、自分がその人に与える影響を考えると、その人の人生に重要な役割を果たすことになる不安もある。(すべてが教師によって決まるとは思っていないが)教師の姿勢でその人が輝けるかどうかが決まってくると思う。一人一人が自分に自信を持って輝けるように、まずは私自身が本気で生徒にぶつかっていきたいと思う。

集中講義の最後に日に、一人一人の思いを語る時間があった。森口先生がこの時間を持つ前に「終わったあと、みんな周りの人がすごく大切に思えるようになりますよ」とおっしゃられたが、そのとき私は「ほんまかな」と半信半疑だった。しかし、実際終わってみると本当に一人一人を大切に思った。友だちをはじめ、全然知らなかった人たちがかけがえのない人に思われた。それはやはり、みんな本気で自分を語ったからだと思う。

本気で語ってくれているのを聞くと、自分も本気で自分自身のことを語ることができた。自分で不思議なくらい本心を言い合うことができた。知らぬ間に信頼関係ができあがっていたのだと思う。本当の「話」をしたと感じた。私は今まで本当の「話」をしたことがあるのだろうかと自分自身に問いかけていた。それくらい私にとって今まで感じたことのない、とても素敵な時間だった。時間の都合で急ぎ足になってしまったが、私はもっと語りたかったし、みんなの話ももっと聞きたかった。

(実は学級歌も歌ってみたかった。でも、家に帰って一人で歌ってみた。いい歌詞だった。)

あの日以来、私は本気で人と向き合おうと心がけている。また、森口先生は「部落問題は自分の中の差別意識とたたかうことだ」とおっしゃられたが、自分をさらけ出すことによって、自分の中の差別意識と闘うことができるのだと思った。私はまだまだ自分の中の差別意識に気がついていないことがある。何気なく発した言葉が、知らぬ間に誰かを傷つけているかもしれない。常に自分自身を見つめる姿勢を身に付けたいと思う。

そして、「今」「ここ」にある現実(差別)を点検し、部落差別をなくしていくことに、生徒が誇りを持って取り組んでいけるよう、熱意を持って生徒と関わっていきたいと思う。

最後になりましたが、森口先生と出会えたことを心から感謝しています。そしてあの時、私を(私たちを)信頼して自分自身を語ってくれた人たちにも、心からありがとうを言いたいと思います。それと、久しぶりに阿波弁を聞くことができてとてもうれしかったです。

(K・Y)